

陸自駐屯地紹介シリーズ 第53回

受け継ぐ菊水 信太山駐屯地

第37普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

大幼47期の丸山哲氏が取材地に希望があるとの由でお会いした。信太山駐屯地を訪問された印象が素晴らしく、大阪歩37聯隊と同番号の信太山をぜひ取り上げて欲しいとのことであった。手元に準備された『大阪陸軍幼年学校アルバム』その他を示しながら筆者が追隨しかねるほどの情熱が籠っていた。陸軍時代の先輩が持つ深い思いを感じたのである。

時を同じくして編集委員長からのメールを受けた。「偕行記事に自衛隊の比率が増えるのは致し方ないが、陸軍の歴史にも触れて欲しいという先輩がたの希望がある。このシリーズにも心してほしい」ということであった。

陸軍には、我が国が近代国家として成長し始めた初期から、目覚ましい奮戦で日本の興隆を築き、欧米植民地崩壊の懸念を揺り起こして遂に世界を敵に廻す大東亜戦争に引き込まれてしまった戦史がある。食糧弾薬欠乏の下

で祖国の悠久を信じ玉砕を重ね、そして戦火の後も裁判を装った復讐劇で命を落とす運命を祖国が甦るためと甘受された方々がある。陸軍の歴史は我々が正しく後世に伝え、日本軍を否定する記述を書き散らす歪曲日本史など一掃しなければならぬと勇躍して信太山に向かった。

アクセス

大阪から阪和線快速列車和歌山行に連結された関西空港行きの車両に乗り込み約40分で和泉府中駅に着く。改札口を出ると駅前には狭い半円形で、客待ちする数少ないタクシーの一台に乗り駐屯地に向かった。

両側の商店は午前9時前なのに灯りがつき、多彩な商品が光っている。道は東に向かって緩い上り坂、その遙か先に一連の山が見えた。歴史上のエピソードに充ちる葛城山地である。ワンメーターも終わらない内に進行方向右側に外柵に囲まれ一段高くなった駐屯地が見えた。大阪府和泉市伯太町官有

無番地、陸上自衛隊信太山駐屯地である。狭い地積が上り坂となって門柱に至り、左側に薄い褐色の警衛所がある。先100m程の所に国旗がはためいている。正門歩哨に來意を告げると丁重な所作で警衛所を指し示され、歩み寄つて来た自衛官から「松村さんでしようか」と声をかけられた。約束の時間にはまだ10分以上あったのに、迷彩服を端正に着こなした女性自衛官であった。

駐屯地広報室の位置は警衛所の向かい側の平屋建てである。多くの駐屯地で広報室は本部隊舎内、即ち駐屯地司令室や業務隊長室に近く配置されているが、この駐屯地では外来者に便利な位置に置いているのだらう。広報室長久宗英俊3尉と名刺交換後、駐屯地のリーフレット他の資料を元に概要を説明頂いた。

駐屯地の概史

日清・日露戦争に勇名を馳せた陸軍野砲兵第4聯隊が大正8年11月に大阪城から移駐して兵営が開設された。その後終戦まで26年間大阪・和歌山の郷土部隊として多くの将兵が出征する場所となり、付近の信太山演習場とともに練武の場所となった。

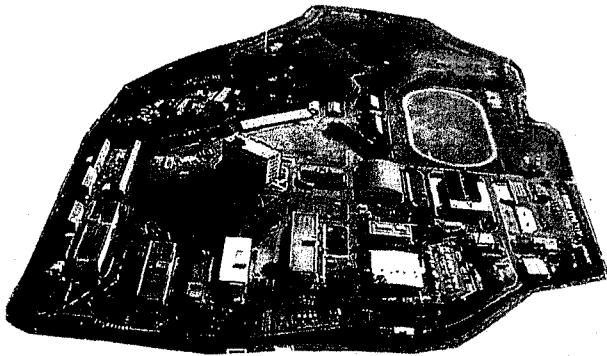
20年、米軍が進駐し米国海兵隊下士官養成学校等が開設されたりしていた

が一時警察予備隊も同居していた時期があった。昭和32年返還となり陸上自衛隊の駐屯地が開設され、近傍にあった信太山演習場も共に返還された。

第37普通科連隊

兵庫県伊丹市に司令部がある第3師団の隷下、三つある普通科連隊の一つで、連隊長大庭秀昭1佐陸自86は信太山駐屯地司令も兼ねている。大和川以南の大阪府下及び和歌山県下を支持隊区としている。

連隊番号の37は陸軍時代大阪城内にあった陸軍歩兵第37聯隊の番号を承けている。自衛隊改編時に当時の陸上幕



信太山駐屯地

僚長杉田一次氏37期が「37」を信太山に充てたと伝えられている。

歩兵第37聯隊は、郷土の千早城、赤坂城に拠って時の幕府北条軍に対抗して建武の中興に貢献し、後醍醐天皇に忠節を尽くして湊川に散った大楠公の忠節を偲んで菊水聯隊と名乗っていたが、第37普通科連隊はその伝統を受け継ぎ同じく「菊水連隊」を名乗り、隊員一同の被る識別帽の徽章の位置には誇らしげに菊水のマークが光っている。また広報室長、広報員の名刺にも菊水の流れがロゴ・マークとして刷り込まれていた。

連隊全員の訓練となれば地積の点から饗庭野、東富士、北富士に足を伸ばす他はないが、ここには中隊、小隊訓練や平素の体力錬成に格好の場所がある。取材した朝も多くの隊員が起伏の多い隊内で駆け足をしていた。スピードも緩やかではなく、多くの隊員がランニングパンツで走っていた。若い隊員に伍して壮年の顔がある。一方で幾つかの小隊程度の部隊が完全武装で隊内を行進していた。同じ経路を何回も周回するのは忍耐力が必要である。隊内にはこの訓練に最適な坂道の連続がある。駐屯地の訓練第一の雰囲気を感じられた。

連隊は至近の距離に信太山演習場を持つている。広くはない。しかし班訓

練や小隊訓練を軽易に繰り返し行える距離的便利さと起伏、植生は基礎動作修得には格好の演習地であろう。

この連隊の副連隊長は三宅匠2佐で、本部管理中隊と第1から第5までの各中隊、重迫撃中隊がある。

この連隊が実施した主な災害派遣と国際貢献について見てみよう。

災害派遣(人員数は延べ)

平成6年 和歌山タンカー重油流出 209名、31両

平成7年 阪神淡路大震災 1万6千余名、5千800両

平成16年 新潟中越地震 1万1千余名

平成20年 和歌山田辺市山林火災 187名、46両

平成21年 和歌山御坊市山林火災 117名、29両

国際貢献
カンボジア、東チモール、ゴラン高原



UNDOF ゴラン高原

原、イラク人道復興支援に精鋭を派遣している。

第3普通科連隊直接支援中隊

千僧駐屯地に所在する第3後方支援連隊隷下にあつて第37普通科連隊の駐屯地及び野外における補給整備を直接支援する部隊で、隊長は坂尾勇作3佐である。

この他に

信太山駐屯地業務隊

隊長 橋本幹夫2佐

第389会計隊

隊長 石橋一隆3佐

第318基地通信隊

隊長 山田真一2尉

その他がある。

さざれ石ここに鎮まる

広報班で資料を基に概要を聞いて隊内見学に廻った。案内は広報班長久宗3尉と、カメラを抱えた女性広報班員在間比佐衣3曹である。

行き交う隊員が元気な声で敬礼をしてくる(文末に注)。厳正な規律の中に親愛の情が感じられて何かほっとすることであった。始めに目にしたのは隊内道路を完全武装で行進を続ける小部隊であった。入門の時見かけた部隊だとすれば駐屯地内を何周かした後であろう。額には薄い汗の光があり、写真を撮影させてもらった。

連隊本部庁舎を通り過ぎ植生豊かな

小山があり鍋塚という古墳だという。その前面に良く手入れされた一角があつた。聖域ともいふべき雰囲気の中で、白い看板の由緒書き、褐色の板の上に国歌が墨書されている。さざれ石とはいうまでもなく幾つかの細かい石が一つに固まった巖であり、悠久の年月を表すとして国歌にも歌われている。



さざれ石と大庭駐屯地司令

在間3曹からこの岩がここに鎮座する由来を聞いた。岩の故郷は岐阜県揖斐郡揖斐町春日である。かつて岐阜県で催された物産展でこの岩が展示された時、愛好家が「金はいくらでも出す。譲って欲しい」と申し出たが地域の人是最も相応しい所に安置されなければならぬと信太山駐屯地を選んで寄贈して下さったとのことである。嬉

しい逸話であった。

司令表敬

筆者の背後を見た在間3曹が姿勢を正した「駐屯地司令です」。振り返ると迷彩服姿の自衛官が、驚くこと上衣の袖を高くまくり上げて腕は露出している。筆者は真付きの防寒コートである。挨拶を交換すると「お聞きと思いませんが」「君が代は」は詠まれた時は帝を意味したかも知れないが、長い歴史を経てうちに転じて「我が国家」「我が民族」全体を示す意味に昇華した。故に我が国歌は国家、民族の悠久を折っているのだと追加の説明があった。地域の安全を預かる現職連隊長が精鋭戦士を絵に描いたような姿で自らの心構えとして語られるのは迫力があつた。

そのまま連れだつて本部庁舎の応接室に進んだ。壁に掲げられた10枚近い額と飾り棚の多数の記念品を注視した。特に歩兵第37聯隊の軍旗の2枚の写真は目を引いた。1枚は又銃の上に安置され、別の一枚は軍旗衛兵を従えた旗手に捧持されて、双方とも歴戦の歳月を語る房だけの軍旗であつた。この軍旗は終戦時タイ国で奉焼されている。当駐屯地を訪れるかつての歩兵第37聯隊在籍の方がこの写真を見られる時の思いを忖度して肅然とした。最初に統率方針について伺つた。

「連隊の地理的位置から防衛面での危機感希薄になりがちであるが、『菊水聯隊』の伝統継承を強く打ち出し、不利な戦いと知りつつ敢えて出陣した大楠公の心に副い得るよう、如何なる厳しい状況にあつても任務に対応する心構えを植え付けてゆく」と述べられた。さらに「隊区内の和歌山では知事を始めとして南海地震に強い危機感を持っている。和歌山県内の隊友会



訓練指導中の大庭司令

支部組織と連携して出動準備を整えている。「ことある時、知事から出動の要請を受けて行動を起こすのでは即動とはならない。日頃から出動のための地形情報収集や装備や補給品の積載を完了して置き、災害発生の一報で即、一般命令で現場に急行、現場に至る過程、或いは現場到着後要請を受けた段階で災害派遣命令に切り替えて行動する」。5月末和歌山で山火事が発生し

た折もこの考えで17名が出動した。幸い陸自航空科部隊の空中消火で鎮火し我々の出番に至らなかつた。空振りで見られるかもしれない。だが大きな意義がある。地域の方々には災害発生場合には間髪を入れず自衛隊が駆けつけるのだと知ればパニックは防げよう。自衛隊からすれば出動の訓練となり、地方公共機関は自衛隊との調整機関を迅速に立ち上げる訓練となる。何よりも遅れて取り返しの着かないことになってはならなかつたのだ」と力強く強調された。表敬を終えて階段を降りる途中、連隊長以下全員の持久走ランタ付け表が掲示されていた。連隊長は73人中75番、驚くべき体力である。



模範展示中の在間4段 (左)

表敬を終えて広報室に戻り、駐屯地広報紙の下端に女性自衛官の銃剣道防具着用用の写真をみつけた。案内に立ってくれている在間3曹であつた。銃剣道4段、今まで何回か銃剣道の型展示をしたことがあるという。自宅にある

という写真を送ってもらう約束をした。

広報室長の家族の話になった。10歳のお嬢さんが駐屯地の「銃剣道信太山クラブ」に参加して練習を重ね全国大会の小学校3年生、4年生の部で連続



銃剣道全国大会で連続優勝した久宗姉妹



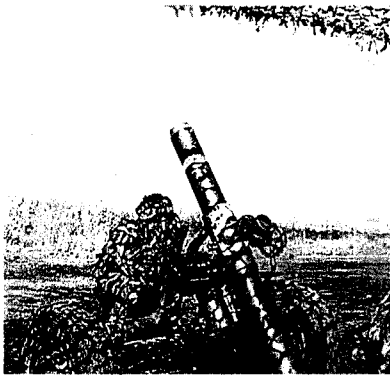
100km マラソンで世界一の宮里 3曹

優勝したという。陸士の先輩がたと雖も、小学校から銃剣道の錬磨をされていた方は少ないのではなからうか。

さらに紙面に大きく掲載されている記事があった。1中隊宮里康和3曹がベルギーで開催された国際ウルトラランナーズ協会公認の100kmマラソン世界選手権大会で優勝した。アキレス腱を損傷しスピード走には致命的なハンディを背負った時、ならば持久走でと発憤し努力を重ねた結果世界一となったという。倒れても七度、まさに菊水連隊である。

戦力は食事から？

取材に先立つ調整で部外者喫食希望の有無を、更に駐屯地司令との会食希望も問われたが、隊員食堂で若い隊員が食事する様子を取材しなかったのので感謝しつつ会食は辞退した。隊員食堂入り口で列に並び配食を受けた。中華



実弾射撃中の120mm迫撃砲

麵と雑穀米で、60歳を超えた身には量が多すぎたが美味い。若い隊員が配食の列に、「食うぞ」と勇み立っている姿が頼もしかった。調理と配食の場を見ると、調理するのは隊員ではなく、アウトソーシングで業者委託である。これは望ましい姿なのであるか。長期行動期間中の僅かな楽しみは食事である。業者委託が望めない行動先で、日ごろ炊事に関わらず練度の上がつていない隊員が作る食事は出動隊員を満足させるであろうか。アウトソーシングそのことよりも、それを余儀なくさせる陸自への無理解な定員削減を疑問に思った次第である。

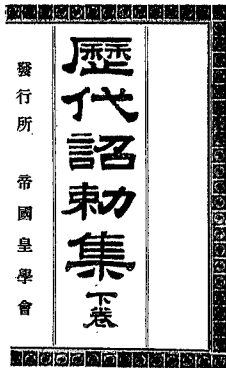
修史館拝観

この駐屯地には「修史館」と名を冠した史料館がある。敷地内の高台にある高床式の木造建物である。この建物は終戦前は砲兵第4聯隊の将校集会所であり、更に遡れば明治天皇姫婿北白川成久王殿下が砲兵聯隊の大隊長として勤務された時ご使用された由緒がある。右側は幹部集会所として講堂態様を保ち、左半分は修史館として整備されている。ここには歩兵37聯隊軍旗(複製)を始めとして2百点を超える品々が展示されている。中でも大楠公奉仰の書画、大阪陸軍幼年学校の訓育を偲ばせる金剛山系の写景図などがある。

陸軍歩兵第37聯隊は明治29年11月20日編成業務開始、31年3月24日軍旗を拝受し大阪城内兵営で誕生した。明治37年2月10日対露宣戦布告直後の2月15日には早くも第3大隊が朝鮮元山守備の為屯営出発、主力は4月27日征途に上った。その後遼東半島南山の戦闘を皮切りに北上して幾度かの会戦に参加し明治38年3月10日には奉天城に突入している。

凱旋後幾度か朝鮮等に警備のため駐屯した。昭和10年満州派遣、昭和15年支那派遣と転戦し、昭和17年3月にはリンガエン湾に上陸しバタワン、コレヒドール要塞攻略に参加している。昭和20年2月にはスマトラからタイに転進し、終戦の後、9月2日に軍旗を奉焼している。その前後の光景は靖國偕行文庫所蔵の『大阪陸軍歩兵第三十七聯隊史』に掲載されている。

この駐屯地は大阪陸軍幼年学校との



發行所 帝國皇學會
西南の役歩兵第八聯隊第一大隊長大島 義典へ勅語
改等語に應見馬建征討の軍に從ひ各部下を率ひ奮戦し結果と戦勝を成し平定功を奏す 朕深く其責任を蒙り喜ぶ

歩兵8聯隊に対する御嘉賞の勅語

跡地関係はない。ただ同校が多用した演習場が信太山演習場であり、行き場のない同校を偲ぶ幾つかの品が此処信太山駐屯地に辿り着いて、卒業生が懐旧の品々を求めて訪ねられ、「あった」と叫び声を上げる展示物がある。「大楠公」を讃える書画であり。「菊水」の紋所であり、生徒監作の写景図である。つい最近訪れて感激したメンバーが寄託された幼年学校の軍服一式も飾られていた。60余年の歲月経過に拘わらず、惜春の思いと共に大事に保管されてきたものか傷みもなく終の飾り棚に行き着けた感があった。

見学を終える間際、説明をしていた若狭慎也2曹が質問してきた。「勝ち戦に縁のないように言われる大阪歩兵第8聯隊の名譽を挽回出来る記録を探しています。偕行社ならば手づるをお持ちではないかと……古老の間に西南戦争の後、明治天皇が歩兵第8聯隊の奮戦をご嘉賞されたと言ふ言い伝えがありました。しかし確たる記録に行き着きません」。真剣さに打たれ筆者の防大時代の教官、大東信祐氏陸自57なら知見をお持ちではと偕行社へ電話した。後日、大東「教官」は靖國偕行文庫を探索して帝國皇學會発行の『歴代詔勅集』に次があるのを見付けて下さった。

西南の役、歩兵第8聯隊第1大隊長、大島義昌(勅語(当用漢字に置き換え)「汝等先に鹿兒島逆徒討の軍に従い各部下を率い奮戦激闘累月艱難を経て遂に平定の功を奏す」朕深くその職任を尽くすを嘉みす)

この写しを修史館に展示できるように、元靖國偕行文庫室長・元防衛研究所戦史部長と權威を冠した大東氏の名で駐屯地広報室に送った。若狭?曹も喜んで貰えるだろう。偕行社が陸自の精神伝統教育の支援ができて、筆者も殊の外嬉しい。良い教官を持つのは財産である。

信太山演習場見学

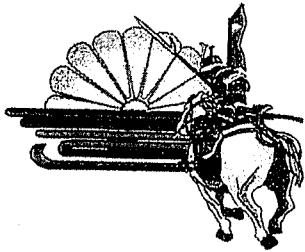
演習場に軽装甲機動車に乗って案内された。案内は久宗広報室長、操縦は藤川太郎曹で、筆者は軽装甲車には初めての搭乗である。

先日大阪陸軍幼年学校のグループが駐屯地を訪問、演習場も見学し大興奮され、特にこの最高地点松原台に立ち東方30kmの金剛山系を望んで懐かしさの歓声が上がったと聞いた。生徒監から聞く大楠公の事蹟に血潮を湧かせた昔を思い起こしてのことであろう。

おりしもこの演習場で中隊検閲が実施されている最中と聞いた。しかし元自衛官として偵察眼力の自信は見事に吹き飛んだ。演習中を示すスズラン

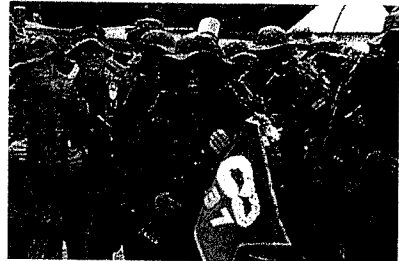
テープの他は隊員一人たりとも目にするのが出来なかった。偽装を徹底しているのであろう。演習場は確かに狭い。しかしながら前述の様に輕易に野外訓練出来る演習場は精銳部隊には欠かすことが出来ない。維持するために地域住民、関係官公署の協力が必須であるが、幸いこの駐屯地には3千5百名を超える協力会を始めとして地域の方々との交流がある。歴史の跡、千早・赤坂・葛城を望みながらその絆がいよいよ固くなることを祈った。

毎度少ない紙数で書きたいことが多い。筆力の及ばないことをお許し頂きたい。多忙な時期に取材に応じて頂いた駐屯地司令及び広報室ご一同のご配慮に心から感謝したい。追記する。この素稿を見て貰った編集委員長から質問された「自衛隊では敬礼の時に声を出すのかね」。筆者の方が驚いた「陸軍では黙って敬礼したのですか」。筆者の現役時代でも、朝



行き交う時に近しい間では「お早うございます」「おはよう」、激しい訓練や作業の後では「ご苦労さま」「ご苦労」と拳手とともに挨拶も交わすのが普通であった。無言の答礼では堅苦しい人、冷たい人と取られかねない。敬礼と同時に信頼を呼ぶのである。もちろん節度あるべき時は別だけれども。自衛隊のそういう面もこのシリーズで知って頂きたい。

文責 松村興延 陸自64



レンジャー訓練



創立記念日行事 (4月)



阪神淡路大地震災害派遣